

# 卒業時における短大生の意識

## についての一調査

富 安 玲 子

### はじめに

大学が特定の人にもみ開かれた場ではなくなってから、すでに久しく、進学率は増加の一途を辿ってきた。今年度になって、ようやく、その傾向が鈍り始めたとはいえ、現在の短大・大学生は、同年齢層の38.6%を占めているという。急激な社会の変化、価値観の多様化、ありあまる情報の波の中であって、明確な目的意識を持たずに、大学の門をくぐる青年の多いことは、しばしば指摘されてきている。

従来、大学生の年代は、発達心理学上から青年後期に位置づけられ、身体的成熟は殆んど完成し、精神的動揺も過ぎようとしつつあって、ようやく成人に近づこうとしている時期<sup>1)</sup>とされてきている。しかし、青年期のおわりを22,3歳とする考えに対して、笠原<sup>2)</sup>は、精神医学の臨床的知見から、青年期の延長を主張している。その理由として、社会的経済的歴史的变化により、長く家庭外教育の場に止められるようになる一方では、社会の側からも奨学制度や労働条件の保護も強化されて、経済力さえ獲得して、成人期への階段を上ることを意図的に延期しても何ら痛痒を感じなくなったこと、及び、日進月歩の技術革新についていくには、「これで十分」という心理的ゴールがやって来ないという不充足感をあげて、青年期の終焉を30歳前後にまでもっていかうとする。

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

このように、青年期の捉え方も、社会の流れを無視できない。たしかに現在の教育体制のもとでは、発達のプロセスとしての精神的動揺を受けとめ、乗り越えるゆとりを持つことができず、ただひたすらに「入学すること」が目的であるとさえ考えられるような稀薄な進学目的意識しか持たずに、自己との対峙の場を引き延ばされているものが多いと考えられる。そして、そのことが結局は、大学における休・退学者や不適応者を多く生み出すことになる理由のひとつであることが、学生相談の窓口を通しても知ることができる。

その能力、家庭的背景、将来への志望、進学の目的など、さまざまに多様化した条件をもつ学生に対応しなければならないところに大学教育の難しさのひとつがあると思われるが、その学生たちが、現実に、より充実した学生生活を送れるように願う、側面からの活動のひとつとしての学生相談室の役割について、カウンセラーを兼務するものとして考えてみたい。

学生相談室の職務のひとつは、不適応を起こしている学生の悩みの解決への援助や、より積極的に大学生活を送ろうとするものへの情報提供や助言を行うことである。多くの大学では、心身の障害者の早期発見・早期治療のためのスクリーニング・テストを実施しているが、その目的としては①サービスとケアの対象者の選別 ②学生集団の精神衛生的情報収集 ③個人面接のための予備資料 ④精神衛生への関心と動機づけ ⑤精神衛生機関のPRがあげられている<sup>3)</sup>。目的①にそって、選別されたものを出し、面接の結果、有所見者が発見され、治療が開始されることになる。しかし、この選別の段階で、早期治療を必要とされるものが見落される場合も案外多く、テストの妥当性についての疑問が指摘されたりもしている。また、たとえ、テストによって、ある学生の問題徴候を正しく把握し得たとしても、それがそのまま、その人の不適応行動とは結びついていかない場合も少なくない。それは、行動をその人のトランスとの関係で捉えていかねばならない側面のあることを示していると思われる。一回の

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

テストでそのトランスをも計り、見落とし・見過ぎの過誤に陥らずに、要治療者を選別できる妥当性の高いテストがない現在、テストの目的が選別だけではなくとも、専任スタッフのいない本学の相談室では、選別されたものすべてに呼び出し面接を行うゆとりがなく、スクリーニング・テストの実施を見合わせ、自発的来談に頼っている現状である。

来談者に対する相談と並ぶもうひとつの職務は、学生の実態を知る努力をすることであると考えられる。より充実した大学生活を送れるように願って、よりよい教育的環境条件を整備するためにも、学生が何を望んでいるかを知らねばならない。その線に添って、入学の目的、専攻学科選択の動機、悩みなどの調査を入学直後に行い、入学時の学生の実態を知ろうとしてきた。<sup>4) 5) 6)</sup> そして、それらの調査結果を教職員のみならず、学生にも知らせることによって、相談室のPRも兼ねようと意図してきた。

ここでは、この入学時の調査に続くものとして、本学園短大生が卒業に際して、自らの学生生活をどのように評価しているかを知ろうとして行った調査の結果を報告したい。

## 調査の目的

前述のように、短大卒業の時点で、二年間を振り返り、その学生生活をどのように評価し、位置づけているかを知ることが目的として、(1)短大入学の目的 (2)短大生活の有意義感 (3)専攻学科選択の動機 (4)専攻学科選択に対する満足度 (5)専攻した学問についての卒業後の見通し (6)授業時間について (7)授業内容・方法について (8)家庭での勉学について (9)勉学についての充足感・満足感 (10)課外活動 (11)人格形成への影響 について調査を行った。

調査時期 昭和51年3月26日

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

### 調査対象

愛知淑徳短大 2 年生

家政学科被服コース	158名	}	計 603名
食物コース	146名		
国文学科	127名		
英文学科	172名		

## 調査結果

### (1) 短大入学の目的

入学した最も大きな目的として多くあげられたのは、表1のように、全体の傾向として、「豊かな教養を身につけ、人間的に成長するため」32.5%、「学園生活を楽しむため」27.8%である。次いで「先生や友人との人間的接触を得るため」10.1%と「専門知識や技術を身につけるため」9.9%があげられている。ここから、短大を専門教育の場と考えるよりも、教養の養成の場と学生自身も考えている結果を明確に見ることができる。しかし、専攻学科によって、多少差が見られ、国文・英文学科よりも家政学科の2コースに、少ないながらも、より専門教育への志向が認められる。また、家政学科の中でも、食物コースに人間的接触を求め、学園生活を楽しもうとする志向が多く認められる。

### (2) 短大生活の有意義感と入学の目的との関係

上述のような目的をもって入学した学生が、卒業に際して、その生活をどのように評価しているかを見ると、表2のようになる。各学科コース共に「有意義だった」とするものが非常に多く、全体の83.5%のものが認めている。

短大生活に対する満足度についての全国的調査<sup>7)</sup>では、満足しているもの35.2%と低い。本短大の入学時の調査<sup>4) 6)</sup>では、満足感を60~70%

表1 短大に入学した目的・動機（もっともよく該当するものひとつに○）

項	目	被服コース	食物コース	国文学科	英文学科	全 体
1	将来の職業のためには短大での準備が必要だから	2.5%	0%	2.0%	5.9%	2.8%
2	豊かな教養を身につけ人間的に成長するため	33.1	24.6	34.7	37.0	32.5
3	専門の知識や技術を身につけるため	19.0	11.8	3.1	5.2	9.9
4	学園生活を楽しむため	20.7	33.6	31.6	26.7	27.8
5	家族が短大進学を望んだから	5.0	3.6	4.1	3.0	3.9
6	先生に短大進学をすすめられたから	1.7	0.9	0	0	0.6
7	現在の社会では高校卒の資格では不十分だと思うから	6.6	1.8	9.2	7.5	6.3
8	先生や友人との人間的接触を得るため	4.1	17.3	10.2	9.6	10.1
9	就職の条件をよくするため	0	0	1.0	0.7	0.4
10	友人がたくさん進学するので	0.8	1.8	2.0	0.7	1.3
11	結婚準備のため	0.8	1.8	0	0.7	0.9
12	とくに考えていない、なんとなく	4.1	2.7	0	2.2	2.4
13	わからない、他	1.7	0	2.0	0.7	1.1
	計	100.1	99.9	99.9	99.9	100.0

卒業時における短大生の意識についての調査

表2 入学目的と短大生活の有意義感との関係

		被服コース	食物コース	国文学科	英文学科	全 体	
有意義だった	目的がなかった	19.0 %	15.1 %	15.7 %	5.8 %	13.6 %	
	目的には必ずしも添わなかったが	47.5 %	40.4 %	50.4 %	52.3 %	47.8 %	83.5
	目的がはっきりしなかった	20.9 %	26.7 %	18.9 %	21.5 %	22.1 %	
有意義ではなかった	目的がかなえられなかった	1.9 %	1.4 %	2.4 %	4.7 %	2.7 %	
	目的がはっきりしなかった	3.8 %	4.1 %	4.7 %	4.7 %	4.3 %	7.0
なんともいえない		4.4	9.6	6.3	10.5	7.8	
無 答		2.5	2.7	1.6	0.6	1.8	
		100.0	100.0	100.0	100.1	100.1	

表3 入学目的（ベスト4）と合目的性・有意義感との関係

入学目的	合目的性		有意義感		なんとも いえない	無答	計
	目的がなかった	目的がかなえられなかった	有意義だった	有意義ではなかった			
豊かな教養を身につけて 人間的に成長するため	13.9 %	61.6 %	2.0 %	15.9 %	2.0 %	3.3 %	100.0 %
学園生活を楽しむため	16.3	42.6	1.6	28.7	2.3	7.0	100.0
人間的接触をうるため	21.3	44.7	0	21.3	6.4	6.4	100.1
専門的知識・技術を身につけるため	15.2	50.0	6.5	15.2	2.2	10.9	100.0

### 卒業時における短大生の意識についての一調査

がもっているが、学生自身の在學生に対する調査<sup>8)</sup>では、満足しているもの20%とかなり低い、満足感と有意義感とは直ちに結びつかないかもしれないし、また、他短大の卒業時調査との比較はできないが、在学中、種々の不満があっても、卒業時に、有意義感をもって巣立っていくものが多いことは望ましいこととして評価してよいであろう。

次に、入学の目的との関係で有意感を見ると、「目的にはかなわなかったが、有意義だったとするものが最も多く、「目的そのものがはっきりしなかったが、有意義だった」が次いでいる。「目的にかなない、有意義だった」とするものは、全学生の13.6%にすぎない。その中でも、被服コースはより多く、英文学科により少い傾向が見られる。このように、短大生活が有意義であったか否かは、入学目的が満たされたか否かとは、あまり関係のないところで判断されている様子が窺われる。

では、目的別にその合目的性を見るとどうであろうか。目的としてあげられた上位4位までを取り出してみたのが、表3である。

目的にかなったものは、いずれの場合も多くはないが、「人間的接触を求めて」入学した場合、他よりもやや多くなっている。それに対して、人間的成長を求めたり、専門の知識・技術の習得を目的とした場合に、目的がかなえられなかったとするものが多い。学園生活を楽しむためや、人間的接触を得るため、という入学目的は、目的そのものがはっきりしなかったというものが約30%ほどおり、稀薄な目的意識であったことが窺われる。

更に、入学の目的を次のような3タイプに分けて、有意義感との関連を見たい。即ち、①将来の職業への準備のため、人間的に成長するため、専門の知識・技術の習得のためといった積極的な意味づけをしている積極能動型。②学園生活を楽しむため、人間的接触を得るためといった生活享受型。③家族や先生にすすめられた、友人が進学するから、高卒では不十分だから、なんとなくといった目的の積極性が見られない消極受動型である。これらと有意義感との関連を示したのち表4であるが、明らかなよう

卒業時における短大生の意識についての一調査

に、積極的な意味を入学目的に見出せないまま、入学したものは、何らかの目的意識をもったものに比べて、短大生活が有意義でなかったとするものが、有意に多い ( $0.005 > P$ )

表4 入学目的の3タイプと有意義感との関係

入学目的の型 ※	有意義だった	なんとも いえない	有意義で なかった	計
積極能動型	179人(89.5)%	13人 (6.5)	12人 (6.0)%	200人(100.0)%
生活享受型	154 (91.1)	12 (7.1)	8 (4.7)	169 (99.9)
消極受動型	43 (64.2)	11 (16.4)	13 (19.4)	67 (100.0)
計	376	36	33	436

※ 表1における目的の項目 1, 2, 3, 9, 11 → 積極能動型  
4, 8 → 生活享受型  
6, 6, 7, 10, 12, 13 → 消極受動型

### (3) 専攻学科選択の動機

専攻学科選択の動機をひとつだけあげさせた結果が、表5である。それによると、「自分の適性を考えて、自分で」決定したものが多く、全体の61.6%を占めている。「就職や将来のことを考えて自分で」選択決定した15.6%を加えると、約77%が自己決定したことになる。「他からのすすめによって」や、「合格の可能性を考えて」などの選択のしかたが、少ないことも、各学科共通しているが、細かく見ると、各学科の特徴が窺われる。国文学科は、他の学科に比べて適性を考慮しての選択が多く、被服コースおよび英文学科では、国文学科に比して、就職や将来を考慮しての選択が多い。被服コースの場合、入学目的に専門教育を望むものが他学科より多かったことを考え合せると専門の技術・知識を将来のために役立てようとする志向が、他学科より強いと見ることができよう。

### (4) 専攻学科選択に対する満足度

その専攻学科を選択し、二年間学んだ結果の満足度はどうであろうか。「非常によかった」+2, 「どちらといえばよかった」+1, 「なんとも

卒業時における短大生の意識についての一調査

表5 専攻学科選択の動機

最も大きな選択の動機	被服 コース	食物 コース	国文学 科	英文学 科	全体
1 自分の適性を考えて自分で	51.4%	62.5%	81.6	55.5%	61.6%
2 就職や将来のことを考えて自分で	21.8	10.8	5.3	21.3	15.6
3 合格の可能性を考えて	7.7	11.7	2.6	6.5	7.2
4 親やその他の家族にすすめられて	11.3	2.5	2.6	4.5	5.5
5 学校の先生の意思で	2.8	6.7	0.9	1.3	2.8
6 友人の影響を受けて	2.1	0	0.9	1.9	1.3
7 なんとなく	2.8	5.0	4.4	9.0	5.5
8 その他	0	0.8	1.8	0	0.6
計	99.9	100.0	100.1	100.0	100.1

いえない」0, 「選んだことを少し後悔している」-1, 「選んだことを非常に後悔している」-2, として, 各学科の平均満足度を求めると, 次のようになる(カッコ内は標準偏差)。被服コース1.28(0.72), 食物コース1.08(0.85), 国文学科1.04(0.95), 英文学科0.86(0.94), 全体では1.06(0.88)で, 約84%が満足を表明している。中でも満足度の高いのが被服コースで, 後悔しているものは2.6%にすぎない。それに対して, やや低い傾向なのは英文学科で, 後悔しているものも12.2%見られた。

次に, この満足度を選択の動機との関係で見るとどうであろうか。選択の動機を表6のように3タイプ, 即ち, ①自分の適性や就職・将来を考慮して専攻を選択した生活設計型。②合格の可能性をまず考えた入学優先型 ③他からすすめられたり, 影響を受けたり, なんとなくといった依存附和型に分けて見ると, 選択の動機と満足度とは有意に連関が認められる ( $0.05 > P$ ), ここから, 適性を考え, 将来への見通しを立てて自己決定したことが満足感を大きくしている傾向があるといえよう。短大入学時の調査<sup>4)</sup>では, 生活設計型にやはり満足感をもつものが多く78.5%であるのに対して, 依存附和型では満足であるもの18%, どちらともいえない59%であった。同一調査対象者ではないが, この傾向は, 二年間の連続調

卒業時における短大生の意識についての一調査

査で大きな変動も認められないので、本調査対象者も恐らく同傾向であったと思われる。とすると、生活設計型でも満足者を増加させ、また依存附和型でも71%の満足者を出していることは、全体として、二年間の教育の望ましい効果とも見ることができよう。

更に、この連関を学科別に見ると、被服コースでは、選択の動機がたとえ依存附和型であっても、後悔しているものが7.4%で、他学科よりも少ないのに対して、英文学科では、依存附和型選択者で後悔を表明しているものは30.8%になっている。こうした差は、その専攻学問分野や学科の性格によるものか、各々の専攻学科を選択する学生の側の条件によるものかは明らかではない。しかし、いずれにしても、短大生活の出発前の主体的な選択が満足へとつながっていく道すじにあるということはいえよう。

表6 専攻学科選択の動機の3型と満足感との関係

満足度 \ 選択の動機※	生活設計型	入学優先型	依存附和型	計
選んでよかった	365人(89.0)%	26人(68.4)%	56人(71.1)%	450人
なんともいえない	20 (4.9)	5 (13.2)	12 (14.5)	37
選んだことを後悔している	25 (6.1)	7 (18.4)	12 (14.5)	44
計	410 (100.0)	38 (100.0)	83 (100.1)	531

※表5における動機の項目 1, 2. → 生活設計型  
3 → 入学優先型  
4, 5, 6, 7→ 依存附和型

(5) 専攻した学問についての卒業後の見通し

学んだ専門分野の勉強についての見通しについては、表7のとおり、全学生の36%が「専門の勉強を続けていくつもりである」と表明しているが、それとほぼ同数の学生が「続けてはいきたいが、現実にはできないだろうと思う」と悲観的になっている。しかし、こうした反応も、学科別に見ると、かなり異なった傾向が認められる。「続けていくつもり」というものは、被服コースで最も高く62%おり、したがって「現実にはできない

卒業時における短大生の意識についての一調査

だろう」とする悲観的表明者は他学科よりも少ない。それに対して食物コース、国文・英文学科では、「続けていくつもり」のものを、「現実にはできないだろう」とするものが上回っている。中でも食物コースは「続けていくつもり」のものが21.9%と低く、「一応専門分野については学んだので、これからは他のことをしていきたい」ものが、他学科より多く見られる。また、国文学科には、「専門を学んだという意識はあまりないので、どうするかわからない」と考えているものが、他学科よりもやや多い傾向が認められる。

表7 専攻した学問の卒業後の見通し

	被服 コース	食物 コース	国文学科	英文学科	全 体
1 学んだ専門の勉強を何らかの形で続けていくつもり	62.0%	21.9%	28.1%	80.2%	36.2
2 勉強の続けていきたい現実にはできないだろう	23.4	38.4	35.9	40.7	34.7
3 一応専門分野について学んだので他のことをしていきたい	7.0	17.1	6.3	6.4	9.1
4 この分野で自分を生かしていけるとは思えないので他ことをする	4.4	6.9	5.5	7.6	6.1
5 専門を学んだという意識は余りないのでわからない	3.2	12.3	19.5	14.0	11.9
6 その他	0	1.4	2.3	0.6	1.0
7 無 答	0	2.1	1.5	0.6	1.0
計	100.0	100.1	100.1	100.1	100.0

こうした将来への見通しを、専攻学科選択の動機との関連で見たのが、表8であり、その結果、両者は有意に関連が認められる ( $0.005 > P$ )。合格の可能性から専攻学科を選んだ入学優先型のものは、他の型に比べて、「専門の勉強を続けていくつもり」のものは少なく、「一応学んだので他のことをしていきたい」ものや、「学んだ専門分野で自分を生かしていけるとは思えないので、他のことをしていきたい」ものが多い。依存附和型も、生活設計型に比べると、「他のことをしたい」「どうするかわからない」とするものが多い傾向が窺われる。

卒業時における短大生の意識についての一調査

表 8 専攻した学問の卒業後の見通しと専攻学科選択の動機との関係

	生活設計型		入学優先型		附和依存型		計
	人	%	人	%	人	%	
1 学んだ専門の勉強を何らかの形で続けていくつもり	168	(41.1)	5	(13.5)	24	(30.4)	197
2 勉強を続けていきたいが現実にはできないだろう	146	(35.7)	14	(37.8)	25	(31.6)	185
3 一応専門分野について学んだので、他のことをしていきたい	36	(8.8)	6	(16.2)	6	(7.6)	48
4 この分野で自分を生かしていけるとは思えないので他のことをする	22	(5.4)	5	(13.5)	8	(10.1)	35
5 専門を学んだという意識は余りないのでわからない	37	(9.0)	7	(18.9)	16	(20.3)	60
計	409	(100.0)	37	(99.9)	79	(100.0)	525

二年間の生活で学んだ勉学を卒業後に生かしていくか否かという展望についてまでも、専攻選択の時点での意識が意味をもつということは考えねばならない点であろう。

また、専攻学科選択に対する満足度との関連を見ると、当然のことながら満足しているものは、後悔しているものよりも、「続けていくつもり」とするものが多く、「他のことをしたい」「どうするかわからない」とするのは、後悔しているものの方が多かった。

#### (6) 授業時間について

短大は、その年限の関係から、授業時間が多く、そのことが、大学は自由なところという先入観をもって入学した学生にとっては、不満の原因のひとつとなっていることを耳にするが、二年間を振り返って、どのように感じているのであろうか。

一年時は「多すぎた」30.2%、「まあ多い方だった」43.8%、「適当」23.7%、「少なかった」2.0%であるのに対して、二年時になると、「適当」が64.0%で最も多くなり、「少なかった」16.4%と「まあ多い方だった」14.6%が相半ばし、「多すぎた」3.2%と少なくなっている。

このように、授業時間については、一年のときは多く、二年になると適

当たと思うのが大多数の見方といえようが、卒業時には、それをどのように認識しているのだろうか。「ちょうど適当だった」32.0%、「多かったが、仕方ないと思った」22.9%、「多かったが、勉強できてよかった」18.4%で、積極的であれ、消極的であれ、是認しているものが73.3%にもなる。それに対して、「多くとったが、余り有意義ではなかったと思う」8.8%、「多すぎて困ったので、もっと少ない方がよかった」7.3%と併せて16.1%が否定的見方をしている。また、「もっと多くとればよかったと思う」という意欲を示すものが7.5%であった。以上の結果は、各学科、コースとも大体同じ傾向を示している。

### (7) 授業内容・方法について

授業内容については、概論的な「広く浅い」内容の授業が多く、専門分野についての「狭く深い」内容の授業が少なかったと思うのが、平均的な見方である。そして、「実践的・応用的」授業が少なく、「理論的・基礎的」授業が多かったと思う傾向が看取される。ただ、実践的・応用的内容の授業に関しては、学科によってかなりの見方の差が認められる。即ち、被服コースでは、「多い方だった」とするものが最も多いのに対して、国・英文学科では「少なかった」とするものが多く、専門分野の性格を現わす結果といえよう。

次に、実験・実習・ゼミなどのいわゆる講義・講読以外の授業については、被服・食物両コースで「多い方だった」と感じるものが多く、国・英文学科では「少なかった」と感じるものが多い。そこで、そのような授業についての感想を尋ねた結果が、表9である。被服コースでは、「ちょうどよかったと思う」ものと「多かったが、勉強できてよかった」ものが多く、食物コースでは、「ちょうどよかった」「もっと多くあるといいと思った」ものが多い。また、国・英文両学科では、「もっと多くあるといいと思った」ものが最も多い割合を占めているが、その傾向は英文学科においてより顕著である。

卒業時における短大生の意識についての一調査

表9 講義・講読以外の授業について

	被服 コース	食物 コース	国文学科	英文学科	全 体
1 多すぎて困ったので、もっと少ない方がよかった	0.6%	2.1%	0 %	2.3%	1.3%
2 多かったが、勉強できてよかった	25.3	15.1	3.1	3.5	11.9
3 多かったが、仕方がないと思った	19.0	15.8	5.5	9.9	12.8
4 多い割合には余り有意義ではなかった	8.9	15.8	14.2	7.0	11.1
5 もっと多くあるといいと思った	14.6	24.7	47.2	57.6	36.2
6 ちょうどよかったと思う	28.5	25.3	25.2	18.0	24.0
7 その他	0	0	3.9	1.2	1.2
無 答	3.2	1.3	0.8	0.6	1.5
計	100.1	100.1	99.9	100.1	100.0

(8) 家庭での勉学について

家政学科の場合は、講義実習の補足および家庭課題など、国・英文学科の場合は、講義前準備および論文作成などの家庭での勉学に費やした時間について問うと、各学科の特性が反映されたであろう結果となった。

被服コースは、一年時、「多く費やした」66.5%、「まあ多く費やした」23.4%で、合計89.9%が費やしたとし、二年になっても、84%が家庭での勉学に多くの時間を費やしており、他学科に比して高い割合を示している。

食物コースは、一年時、「多く費やした」8.2%「まあ多く費やした」27.4%を併せて35.6%に対して、「あまり費やさかった」ものが58.9%である。二年になると、この傾向はより顕著になる。

国文学科は、被服コースと対照的で、「あまり費やさなかった」もの75.8%で、「多く費やした」ものは2.3%にすぎない。しかし、二年になると、「あまり費やさなかった」もの52.3%と減少し、逆に、「多く」「ま

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

あ多く」費やしたもの38.3%と増加傾向が見られ、論文作成の反映を見ることができるといえる。

英文学科は、一年時、「あまり費やさなかった」もの51.7%に対して、「費やした」もの43%であり、二年になると、「あまり費やさなかった」とするものが、ますます増加の傾向にある。

以上の結果は、あくまでも主観的な時間についてであるが、このような費やし方についての感想は次のとおりである。

被服コースでは、「多く費やしたかいいがあったと思う」ものが65.2%で最も多く、その他の学科では「もっと費やせばよかったと思う」ものが顕著に見られる。即ち、英文学科70.4%、食物コース54.1%、国文学科62.5%のものが、反省をこめて表明している。

### (9) 勉学についての満足度

この二年間、十分に勉強ができてきたかどうか質問した結果を、「充分でできた」+2、「まあできた」+1、「どちらともいえない」0、「あまりできなかった」-1、「できなかった」-2 のように得点化すると、各学科の平均(カッコ内は標準偏差)は、被服コース-0.01(1.20)、食物コース-0.34(1.16)、国文学科-0.92(0.96)、英文学科-0.68(0.99)、全体では-0.42(1.14)となる。どちらかといえばあまりできなかったと思う方向に傾斜しているが、被服コースではその程度が小さく、国文学科で大きい。

また、勉強についての満足感も、「満足している」+2、「どちらかといえば満足している」+1、「どちらともいえない」0、「どちらかといえば不満足」-1、「後悔している」-2 のように得点化すると、平均(カッコ内は標準偏差)は、被服コース+0.22(1.33)、食物コース-0.30(1.23)、国文学科-0.67(1.17)、英文学科-0.66(1.23)で、全体では-0.35(1.29)となり、被服コースのみが満足感を示している。

被服コースにおいて、最も充足感も強く、満足感も大きいことは、家庭における勉学の時間が最も多く、また、それに対しては、「かいいがあっ

卒業時における短大生の意識についての一調査

た」と思うものが多かったことと一貫した結果を示している。

勉学についての充足感と満足感の関連を示したのが、表10である。両者は、おおいに関連が認められるが、少数ながら、「充分でなかったが、満足している」もの、および「充分できたにも拘らず満足していないもの」が見られ、中でも前者に食物コース、後者に国文学科が多い傾向を見ることが出来る。

表10 勉学についての充足感と満足感との関係

充足感 \ 満足感	満 足	なんともいえとい	不 満 足	計
できた	161人(84.7)%	5人( 6.3)%	13人( 4.0)%	179人
どちらともいえない	5 ( 2.6)	14 (17.7)	10 ( 3.1)	29
できなかった	24 (12.6)	60 (75.9)	302 (92.9)	386
計	190 (99.9)	79 (99.9)	325 (100.0)	594

次に、この満足感と短大生活の有意義感との関連を見たのが、表11である。満足感をもつものの98%が有意義だったとし、満足感をもてないものの11.7%が有意義でなかったとしている。学生として当然のことながら、勉学への満足感も、短大生活の有意義感を大きくしていることがわかる。

表11 勉学についての満足感と短大生活の有意義感との関係

満足感 \ 有意義感	有意義だった	なんともいえない	有意義ではなかった	計
満 足	183人(98.4%)	2人( 1.1)%	1人( 0.5)%	186人(100.0)%
なんともいえない	62 (80.5)	12 (15.6)	3 ( 3.9)	77 (100.0)
不満足	247( 77.9)	33 (10.7)	37 (11.7)	317 (100.0)
計	492	47	41	580

(10) 課外活動について

勉学と並んで、学生生活の中でかなりの比重を持っていると考えられる

卒業時における短大生の意識についての一調査

課外活動への参加はどうであったろうか。ここでは、単にクラブ・同好会活動のみならず、学生会、各種実行委員会をも含めた課外活動状況について問うと、結果は表12のとおりである。よく参加したもの、かなり参加した方だというものを併せて45%の参加者となっており、不参加者51%をやや下まわる。しかし、現実には不参加であっても、参加の希望をもっていたものが半数以上を占めていることから、短大生活の中での課外活動への関心はかなり高いことが窺われる。

表12 課外活動への参加状況

	被服 コース	食物 コース	国文学科	英文学科	全 体
よく参加した	18.4%	13.7%	22.0%	17.4%	17.7%
かなり参加した方	22.2	30.1	32.3	25.6	27.2
参加しようと思ってもできなかった	34.2	24.7	20.5	31.4	28.2
参加する気がなかった	23.4	26.0	20.5	20.9	22.7
その他	0.6	1.4	3.1	2.9	2.0
無 答	1.3	4.1	1.6	1.7	2.2
計	100.1	100.0	100.0	99.9	100.0

参加した理由で、最も多いのは「興味や関心があったから」であり、次いで「友人を得たかった」「学生時代の経験として必要だと思った」「人格形成に有意義だと思った」などとなっている。

参加の意志がありながら、不参加を余儀無くされた理由としては、「適当なクラブ・同好会がなかった」と「通学に時間がかかるから」が多い。遠距離通学者は、学生生活を送る上で、かなりの制約を受けていたことが窺われる。

参加の意志もなかったものは、不参加の理由を、「拘束されるのが好きでない」「性に合わない」と、性格面からあげているものが多い。

こうした参加状況を短大生活の有意義感との関連を見たのが、表13である。ここでも、両者は有意に関連が見られ ( $P < 0.005$ )、特に、「よく参

卒業時における短大生の意識についての一調査

加した」ものは他よりも有意義感をもつものが多く、「参加する気がなかった」ものに、他よりも有意義感をもてなかったものが多い。こうしたことから、学生相互の横の関係の活動の中に、積極的に自ら参加することも、短大生活を豊かにしていることが明らかであろう。

表13 課外活動への参加状況と短大生活の有意義感との関係

参加状況	有意義感		有意義ではなかった		計
	有意義だった	なんともいえない	有意義ではなかった	有意義ではなかった	
よく参加した	人 100(94.3) %	人 3(2.8) %	人 3(2.8) %	人 106(99.9) %	
かなり参加した方	141(86.0)	15(9.1)	8(4.9)	164(100.0)	
参加しようと思ってでも できなかった	143(85.1)	17(10.1)	8(4.8)	168(100.0)	
参加する気がなかった	104(75.9)	15(10.9)	18(13.1)	137(99.9)	
計	488	50	37	575	

(11) 人格形成への影響

二年間を振り返って、人格形成に影響を与えた人物について問い、該当するものすべてをあげさせた結果が、表14である。各学科とも同じような傾向を示し、最も多いのがクラスの友人である。クラスの結びつきがかなり強固であることを裏づけるものであろう。次いで、学外の友人、クラブの

表14 人格形成に影響を与えた人物（該当するものすべてに○）

	被服 コース	食物 コース	国文学科	英文学科	全体
先生	25.8%	13.6%	17.8%	25.9%	21.2%
クラスの友人	70.4	73.5	72.9	61.8	69.3
クラブの友人	30.8	25.9	48.1	31.8	33.6
クラス・クラブ以外の学内の友人	9.4	11.6	14.7	8.8	10.9
上級生・先輩	14.5	12.9	15.5	12.4	13.7
学外の友人	39.0	39.5	48.1	42.9	42.2
その他	3.2	3.4	3.9	1.2	2.8
なし	3.1	0	0.8	2.4	1.7

卒業時における短大生の意識についての一調査

友人となっている。教師をあげるものが少ないのは、密接な接触をもつ機会の少なさも手伝っているのであろうか。学外の友人が比較的多くあげられているが、後述の影響力の大きい「ことがら」とも考え合せてみると、学生や社会人、同性や異性の友人が含まれ、幅広い層を意味していると考えられる。

次に、影響を与えたことがらについて見ると、表15のように、アルバイトの経験が最も多く、旅行、クラブと続く。読書を通しては、家政学科よりも国・英文学科で多くの影響を受けていると表明していることは、容易に頷くことができよう。学んだ勉強が、人格形成に影響を及ぼすほどには深くかかわれなかったものが多く、アルバイトや旅行の中に、影響力の大きさを見出しているということは、彼女たちの生活空間が物理的にも心理的にも、学内に留まらず、外へ外へと開かれていることを意味していると考えられる。

表15 人格形成に影響を与えたことがら（該当するものすべてに○）

	被服コース	食物コース	国文学科	英文学科	全 体
学 問	32.7%	22.5%	28.7%	30.6%	28.8%
学 校 行 事	20.1	7.5	15.5	14.7	14.6
ク ラ ブ	34.0	34.0	49.6	34.1	37.4
書 物	22.6	19.7	44.2	38.2	30.9
ア ル バ イ ト	40.3	52.4	47.3	50.0	47.4
旅 行	34.6	45.6	48.1	40.6	41.8
そ の 他	3.8	6.8	5.4	1.8	4.3
な し	6.9	0.7	0.8	2.4	2.8

結果の考察および今後の問題

以上の結果のように、専攻学科によって、その特徴が見られるが、全体

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

として、教養の養成を入学の目的とするものが多く、特に、文学科においては、専門的知識・技術の教育の場としての意識が稀薄であることが明らかにされた。石郷岡の指摘にあるように、「専門科目」「専門職への過程」という意識よりは、むしろ、意識構造自体の中で専門科目と教養の明確な分化のない「専門科目」それ自体がすでに教養としての機能をはたしている状況<sup>9)</sup>であるといえよう。このことは、専攻した学問についての卒業後の見通しに対する反応からも裏付けられる。また、一方では、学園生活を楽しむという生活の享受を目的として入学するものも多い。しかし、高校時代に憧れていた大学生活の自由な時間・活動は、短大という年限上からくる授業時間の多さなどの制約によって阻まれることも多い。それが、前述の学生自身による調査に見られる不満度を高めるひとつの大きな理由となっているのであろう。しかし、短大生活の後半になると、時間的ゆとりが見出せるようになることと、自由記述の中に見られるような「自由の意味をはきちがえていたことに気づき、規律ある自由の意味を知った」り、また、「忙しさの中の充実感を知った。これからも忙しい毎日を送りたい」という意識変容が、卒業時における二年間の生活に対する有意義感を高めていると考えられる。

本調査では、有意義感をもつものが83.5%という高い割合を示した。とにかく、卒業に際して、このような評価をくだすことができるということは、望ましい姿であり、送り出す側からいえば、喜ばしいことである。ところで、一般に、有意義感をもつか否かは、目的志向行動の中で抱えられ、その目的が達成可能となったときに、満足感と共に有意義感に浸ることができるものであると考えられる。しかし、調査結果が示すように、目的が達成されたか否かとは必ずしも対応関係になく、目的が達成されなくても、有意義感をもつものが多い。このことは、目的意識自体が全般的に流動的で稀薄であることを物語っているのであろう。

目的意識はたとえ流動的であったにせよ、入学時に積極的に目的がある

### 卒業時における短大生の意識についての一調査

としたものは、他からのすすめに従ったり、何となく入学して来たものに比して有意義感をもつものが多い。また、勉学についても満足感の大きいもの、および、課外活動に積極的に参加したものと有意義感に関連が深い。こうしてみると焦点化された明確な目的意識でなくとも、ある程度の意識化された目的をもち、何ごとに対しても積極的に取り組もうという姿勢、生き生きとした自己実現に向けての生き方が可能か否かが、有意義感と深く関わっていることになる。

また、専攻学科の選択とそれに対する満足度からも、自己決定の重要性を看取することができる。本調査では、二年間の意識変容については明確ではないが、前述したように、入学時よりもその専攻学科選択の満足者が増加する傾向が見られる。しかし、その中でも、自らの適性を考え、将来への見通しを立てて自己決定したものが、より満足感を大きくしている。入学以前の決定が、卒業時にまでも尾をひいていることがわかる。ここから高校において、進学の意義をさまざまに異なった属性をもつ一人一人の生徒にとくと考えさせ、主体的にみずからの人生設計を、その年齢なりにとことんまでつきつめて考えさせるガイダンス<sup>10)</sup>の必要性を感じざるをえない。

人格形成に影響を与えた人物に対する反応から見て、その生活空間は、教師や、上級生・先輩とのつながりといったタテの関係よりは、対友人というヨコへの拡がりをもち、また、学内に留まらず、外へと拡がっていることが窺われる。また、同じく影響を与えたことがらから、二年間が学業にのみ傾斜した生活ではないことが窺える。そして、更に、クラブ活動をさえも上まわってアルバイトの経験の重要性をあげているものが多いことから、現代学生にとって、いかにアルバイトの役割が大きいかを改めて確認することとなった。

本調査は、まず勉学に焦点を合わせて来たが、調査結果に見られるような志向の多様性から考えて、学生のほんの一部の姿しか捉え得なかったこ

## 卒業時における短大生の意識についての一調査

とを感じる。卒業に際して、多くの学生が表明している「あっという間の短い二年間」であっても、彼女たちにとって、短大がどのような役割をもつものとして内的に組み込まれているのかをより多方面から知る必要がある。そして、多様な拡がりをもつ生活領域の中でも、どこでの成長を最も喜びと感じ、どのような領域での挫折を最も痛みとして感じるのかを知っていかねばならないであろう。また短大・四年制大学をもつ学園の中で、学生相談を担当するものとして、短大・四年制大学の両者の特質を、学生自身がどのように認知し、選択しているのかについて考えてみる必要にもせまれてもいる。これらを知り、理解することから、よりよい相談活動も可能になると思われる。

## 附 記

調査表の作成にあたっては、短大学生課長梅村敏郎助教授、学生課西垣恵子さんに、実施に際しては二年生担任の諸先生方に、そして集計整理の際には、中澤鉦三教授、愛知県教育センター教育情報部長加藤一夫先生はじめ平野利治先生、谷口誠示先生および短大厚生課熊沢寿子さんにお世話になりました。ここに衷心より感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) 遠藤辰雄編 1970 学生生活の心理学的研究 教育心理学年報 10, 78—111
- 2) 笠原嘉 1976 今日の青年期精神病理像 笠原・清水・伊藤編 青年の精神病理 弘文堂
- 3) 渡辺久雄・塚本嘉寿 1973 スクリーニング・テストの実施に伴う諸問題 厚生補導 84, 45—52
- 4) 富安玲子 1975 学生相談室より 淑徳短大 第4号7～9
- 5) 富安玲子 1976 学生相談室より 淑徳大学 第3号5～9
- 6) 富安玲子・熊沢寿子 1976 本学入学生の意識調査について 淑徳短大 第6号6—8
- 7) 日本リクルートセンター 1975 女子学生その意識と行動
- 8) 「学生の意識傾向」1976 淑窓 11号

卒業時における短大生の意識についての一調査

- 9) 石郷岡泰 1962 大学生の生活空間の構造と機能に対する社会心理学的接近  
—とくに女子大学生の調査を中心にして— 心理学評論 6, 105—115
- 10) 岩橋文吉 1975 大学進学と人生設計のガイダンス 教育と医学 23, 857  
—863